

工学系のモデリング A 演習問題

第 10 回

2015 年 6 月 17 日

問 1 標本化と量子化の実例として、以下の 3 例を考える。それぞれが 1 秒間に発生するビット数を求めなさい。

(a) 標本化周波数が 8kHz、量子化ビット数が 8bit の場合：

(b) 標本化周波数が 44.1kHz、量子化ビット数が 16bit の場合：

(c) 1/30 秒毎に 1920×1080 個のサンプルを標本化し、量子化ビット数が 24bit の場合（概算でも可）：

（注） (a) は電話の音声、(b) は音楽 CD の 1 チャンネル、(c) は HDTV 解像度のフルカラー動画画像（RGB 各 8 ビット）に対応する。

解答）

(a) $8000 \times 8 = 64000\text{bit}$ (64kbit)

(b) $44100 \times 16 = 705600\text{bit}$ (705.6kbit)

(c) $30 \times 1920 \times 1080 \times 24 = 1492992000\text{bit}$ (1.492992Gbit \sim 約 1.5Gbit)

問 2 離散 Fourier 変換に関する以下の問いに答えなさい。

(a) $W_N = e^{-i\frac{2\pi}{N}}$ とするとき、次式が成立することを証明せよ。

$$\frac{1}{N} \sum_{n=0}^{N-1} W_N^{nk} = \begin{cases} 1 & (k = 0, \pm N, \pm 2N, \dots) \\ 0 & (\text{otherwise}) \end{cases}$$

ヒント：等比数列の公式 $1 + a + \dots + a^{N-1} = \frac{1 - a^N}{1 - a}$ を使用する。

(b) 離散関数 $f(n)$ が実数のとき、 $F(k) = F(N - k)^*$ ($k = 1, 2, \dots, N/2 - 1$) となることを証明せよ（* は複素共役を示す）。

ヒント： $F(k)$ 、 $F(N - k)$ それぞれを実数部と虚数部に分けて見比べる。

(c) 離散関数 $f(n) = \sin \frac{2\pi}{N}n$ ($n = 0, 1, \dots, N - 1$) の離散 Fourier 変換を求めなさい。

ヒント：途中で (a) の結果を活用する。

解答）

(a) 等比数列の公式に従って変形する。

$$\begin{aligned} \frac{1}{N} \sum_{n=0}^{N-1} W_N^{nk} &= \frac{1}{N} \left(1 + e^{-i\frac{2\pi}{N}k} + \dots + e^{-i\frac{2\pi}{N}(N-1)k} \right) = \begin{cases} \frac{1}{N} \cdot N & (k = 0, \pm N, \pm 2N, \dots) \\ \frac{1}{N} \cdot \frac{1 - e^{-i\frac{2\pi}{N} \cdot N}}{1 - e^{-i\frac{2\pi}{N}k}} & (\text{otherwise}) \end{cases} \\ &= \begin{cases} 1 & (k = 0, \pm N, \pm 2N, \dots) \\ 0 & (\text{otherwise}) \end{cases} \end{aligned}$$

(b) $F(k)$ 、 $F(N-k)$ それぞれを実部と虚部分け、対比を行う。

$$\begin{aligned}
 F(k) &= \sum_{n=0}^{N-1} f(n) e^{-i \frac{2\pi}{N} nk} \\
 &= \sum_{n=0}^{N-1} f(n) \cos \frac{2\pi}{N} nk - i \cdot \sum_{n=0}^{N-1} f(n) \sin \frac{2\pi}{N} nk \\
 F(N-k) &= \sum_{n=0}^{N-1} f(n) e^{-i \frac{2\pi}{N} n(N-k)} = e^{i 2\pi n} \cdot \sum_{n=0}^{N-1} f(n) e^{i \frac{2\pi}{N} nk} \\
 &= \sum_{n=0}^{N-1} f(n) \cos \frac{2\pi}{N} nk + i \cdot \sum_{n=0}^{N-1} f(n) \sin \frac{2\pi}{N} nk
 \end{aligned}$$

よって、 $F(k) = F(N-k)^*$ 。

(c) 2 行目で (a) の結果を活用する。

$$\begin{aligned}
 F(k) &= \sum_{n=0}^{N-1} \sin \frac{2\pi}{N} n \cdot e^{-i \frac{2\pi}{N} nk} = \sum_{n=0}^{N-1} \frac{e^{i \frac{2\pi}{N} n} - e^{-i \frac{2\pi}{N} n}}{2i} e^{-i \frac{2\pi}{N} nk} \\
 &= \frac{1}{2i} \sum_{n=0}^{N-1} e^{i \frac{2\pi}{N} n(1-k)} - \frac{1}{2i} \sum_{n=0}^{N-1} e^{-i \frac{2\pi}{N} n(1+k)} \\
 &= \begin{cases} -\frac{N}{2}i & (k=1) \\ \frac{N}{2}i & (k=N-1) \\ 0 & (otherwise) \end{cases}
 \end{aligned}$$

同様に、 $f(n) = \sin \frac{4\pi}{N} n$ のときは $F(2)$ と $F(N-2)$ 、 $f(n) = \sin \frac{6\pi}{N} n$ のときは $F(3)$ と $F(N-3)$ が非ゼロな値を持つ。

問 3 指導書に記載したように、 $N=4$ の離散 Fourier 変換は以下の行列演算として表される。

$$\begin{bmatrix} F(0) \\ F(1) \\ F(2) \\ F(3) \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 & 1 & 1 & 1 \\ 1 & -i & -1 & i \\ 1 & -1 & 1 & -1 \\ 1 & i & -1 & -i \end{bmatrix} \cdot \begin{bmatrix} f(0) \\ f(1) \\ f(2) \\ f(3) \end{bmatrix}$$

ここで変換行列の第 2 行と第 3 行を入れ替えると、次式のように $F(1)$ と $F(2)$ が入れ替わる。また、変形した変換行列を T とする。

$$\begin{bmatrix} F(0) \\ F(2) \\ F(1) \\ F(3) \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 & 1 & 1 & 1 \\ 1 & -1 & 1 & -1 \\ 1 & -i & -1 & i \\ 1 & i & -1 & -i \end{bmatrix} \cdot \begin{bmatrix} f(0) \\ f(1) \\ f(2) \\ f(3) \end{bmatrix} = T \cdot \begin{bmatrix} f(0) \\ f(1) \\ f(2) \\ f(3) \end{bmatrix}$$

これについて以下の問いに答えよ。

(a) A_2 、 B_2 を 2×2 の行列とすると、行列 T は

$$T = \left[\begin{array}{c|c} A_2 & A_2 \\ \hline B_2 & -B_2 \end{array} \right]$$

の形をしている。この行列 A_2 と B_2 を示しなさい。

(b) 行列 T は、

$$T = \left[\begin{array}{c|c} A_2 & A_2 \\ \hline B_2 & -B_2 \end{array} \right] = \left[\begin{array}{c|c} A_2 & O_2 \\ \hline O_2 & B_2 \end{array} \right] \cdot \left[\begin{array}{c|c} I_2 & I_2 \\ \hline I_2 & -I_2 \end{array} \right]$$

と変形できることを示しなさい。ただし、 O_2 は 2×2 のゼロ行列、 I_2 は 2×2 の単位行列を示す。

(c) 中間出力 $g(n)$ を定義し、次式を考える。

$$\begin{bmatrix} g(0) \\ g(1) \\ g(2) \\ g(3) \end{bmatrix} = \left[\begin{array}{c|c} I_2 & I_2 \\ \hline I_2 & -I_2 \end{array} \right] \cdot \begin{bmatrix} f(0) \\ f(1) \\ f(2) \\ f(3) \end{bmatrix}$$

$g(0)$ 、 $g(1)$ 、 $g(2)$ 、 $g(3)$ を $f(0)$ 、 $f(1)$ 、 $f(2)$ 、 $f(3)$ で表しなさい。

(d) 中間出力 $g(n)$ から $F(n)$ を計算する次式を考える。

$$\begin{bmatrix} F(0) \\ F(2) \\ F(1) \\ F(3) \end{bmatrix} = \left[\begin{array}{c|c} A_2 & O_2 \\ \hline O_2 & B_2 \end{array} \right] \cdot \begin{bmatrix} g(0) \\ g(1) \\ g(2) \\ g(3) \end{bmatrix}$$

$F(0)$ 、 $F(1)$ 、 $F(2)$ 、 $F(3)$ を $g(0)$ 、 $g(1)$ 、 $g(2)$ 、 $g(3)$ で表しなさい。

(e) 本問のような変形は行なわず、離散 Fourier 変換を直接計算した場合は次式になる。

$$\begin{bmatrix} F(0) \\ F(1) \\ F(2) \\ F(3) \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} f(0) + f(1) + f(2) + f(3) \\ f(0) - i \cdot f(1) - f(2) + i \cdot f(3) \\ f(0) - f(1) + f(2) - f(3) \\ f(0) + i \cdot f(1) - f(2) - i \cdot f(3) \end{bmatrix}$$

ここで減算は「負の数の乗算と加算」と考え、加算回数の比較として、上記の直接演算の場合の+と-の符号の個数、および、(c)、(d) で行列分解した場合の+と-の符号の個数を求め、比較してみよ。

(f) 指導書に記載したように、離散 Fourier 変換を直接計算した場合の加算回数と乗算回数は近似的に N^2 回となり、高速 Fourier 変換の工夫を行なった場合の加算回数と乗算回数は $N \log_2 N$ 回となる。具体的に、 $N = 1024 (= 2^{10})$ の場合の、 N^2 と $N \log_2 N$ の値を求めてみよ。

解答)

(a) 変換行列 T から転記して、

$$A_2 = \begin{bmatrix} 1 & 1 \\ 1 & -1 \end{bmatrix}, \quad B_2 = \begin{bmatrix} 1 & -i \\ 1 & i \end{bmatrix}$$

(b) 右辺の行列の積を計算すると、

$$\left[\begin{array}{c|c} A_2 & O_2 \\ \hline O_2 & B_2 \end{array} \right] \cdot \left[\begin{array}{c|c} I_2 & I_2 \\ \hline I_2 & -I_2 \end{array} \right] = \left[\begin{array}{c|c} A_2 I_2 + O_2 I_2 & A_2 I_2 - O_2 I_2 \\ \hline O_2 I_2 + B_2 I_2 & O_2 I_2 - B_2 I_2 \end{array} \right] = \left[\begin{array}{c|c} A_2 & A_2 \\ \hline B_2 & -B_2 \end{array} \right]$$

(c) 単位行列 I_2 の値を当てはめて、

$$\begin{bmatrix} g(0) \\ g(1) \\ g(2) \\ g(3) \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 1 \\ 1 & 0 & -1 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & -1 \end{bmatrix} \cdot \begin{bmatrix} f(0) \\ f(1) \\ f(2) \\ f(3) \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} f(0) + f(2) \\ f(1) + f(3) \\ f(0) - f(2) \\ f(1) - f(3) \end{bmatrix}$$

(d) 行列 A_2 、 B_2 の値を当てはめて、

$$\begin{bmatrix} F(0) \\ F(2) \\ F(1) \\ F(3) \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 & 1 & 0 & 0 \\ 1 & -1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & -i \\ 0 & 0 & 1 & i \end{bmatrix} \cdot \begin{bmatrix} g(0) \\ g(1) \\ g(2) \\ g(3) \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} g(0) + g(1) \\ g(0) - g(1) \\ g(2) - i \cdot g(3) \\ g(2) + i \cdot g(3) \end{bmatrix}$$

(e) 直接演算した場合は、+と-の符号の個数は 12 個。行列分解した場合は、+と-の符号の個数は、(c) が 4 個、(d) が 4 個で計 8 個。よって、行列分解した場合のほうが、加算回数が少なくなっている。

(f) 直接演算を行なった場合、 $1024 * 1024 = 1048576$ 回。高速 Fourier 変換の工夫を行なった場合、 $1024 * \log_2 1024 = 1024 * 10 * \log_2 2 = 10240$ 回。よって、演算回数を約 1/100 に減らすことができる。